



皆さんおはようございます。二学期が始まりました。皆さんにとって夏休みはどんな休みになりましたか。楽しい休みになりましたか。前半はオリンピックがあったので、テレビで観戦し、競技する選手の姿にたくさんの感動をもらった人もいたのではないかと思います。

私も、様々な競技に声援を送り、選手の競技する姿や試合後のインタビューの姿に感動し、学ばされることがたくさんありました。

- 一つ目は「好きなことに挑戦し、自分の可能性を広げる」スケートボード女子ストリートで金メダルを獲得した中学3年生の吉沢心（ここ）さんは、6年生にとっては3歳しか年が離れていません。3年前の東京オリンピックで、メダリストの技が自分が普段やっている技であることに驚き、自分も競技に出てみようと思ったというエピソードがあります。自分自身が熱中してやっていることが超一流につながったという話は、誰にとっても自分がとことん取り組んでみるのが、将来の自分に大きな影響を与えることになる、自分自身の可能性を広げることにつながるのだと改めて感じました。
- 二つ目は、「諦めない」ということ。勝負には勝ち負けがつきものです。たとえ勝つことができなくても、最後まで諦めることなく必死に競技する姿に、心を打たれました。改めて、メダルを目指すことは全てではなく、一つ一つの試合とどのように向き合うかが大切であると思いました。
- 三つ目は「感謝の気持ちを表す」ことです。競技の後のインタビューやSNSへの投稿のなかで、選手自身を支えてくれたスタッフ、共に戦ってきた仲間に対しての感謝の言葉が心に残りました。

たくさんの感謝の言葉の中で、私が一番感動したのは、この人の言葉です。

- 卓球女子団体の銀メダル。女子個人銅メダルを獲得した、早田ひな選手です。早田選手は、女子個人戦で痛めていた左腕の状態が悪化し、何も持てない状態になってしまい、一時は出場が危ぶまれましたが、早田選手自身はもちろん、日本チームスタッフの懸命なリハビリにより、痛み止めの注射をして個人戦では見事銅メダルを獲得し、団体戦でも負担の少ないダブルスに出場し、銀メダル獲得に貢献しました。そんな早田選手に対して、早田選手ができることを探りながら練習相手を務め誰よりも寄り添い、励まし続けたのが、リザーブとして帯同していた木原美悠選手です。
- 団体戦の表彰式、団体戦に出場した早田選手、平野選手、張本選手の3人と共に表彰台上った木原選手の首には、銅メダルがかけられていました。早田選手が個人戦で獲得した銅メダルです。「誕生日のお祝いに、早田選手の銅メダルが見たい。」とリクエストした木原選手。それに応えて、裏方として共に戦ってくれた木原選手への感謝の気持ちを込めて、「団体戦の表彰式で4人でメダルをかけて記念写真を撮りたいと願った早田選手の行動でした。
- 早田選手自身が、3年前のオリンピックで経験した、リザーブとして、選手の気持ちを考えて動くこと、いざという時のために自分も練習すること、一番動かなくてはならない立場の難しさを知っているからこそ、木原選手への感謝の姿でした。

卓球に限らずどの競技でもそんな日本チームとしての力を見せてもらった気がします。

- そんな早田選手の言動から、思い浮かんだのが「徳不孤」という言葉です。この体育館の左に掲げられています。そして、手良小学校には職員室の黒板の上にも掲げられています。
- この言葉の元は、古代中国の思想家だった「孔子」の教えをまとめた「論語」の中に出てくる「徳は孤ならず必ず隣あり」という言葉です。  
徳のある人には、必ず、自分のことをわかってくれる人、協力してくれる人（理解者や協力者）が現れるという意味です。「徳」とは、他者への思いやりの心、正しい行い、礼儀作法やきまりを守ること、物事を理解する力、言うこととやることに嘘がなく一致していることなどです。
- 早田選手は正に徳のある人と考えると、早田選手だからこそ、共に戦った平野・張本選手、支えた木原選手、コーチ、医療スタッフが、早田選手の理解者・協力者として、強いチームとしてまとまったと考えることもできそうです。



「徳は孤ならず」手良小学校で大事にされてきた言葉です。皆さんも、思いやり、きまりを守る、挨拶、学習、自分の考えを持ち、責任をもって行動するなどを大事にしながら生活して行ってほしいと思います。

86日間の長い二学期です。張り切ってスタートしましょう。

以上で終わります。